

ラッセンの戦い —Battle of Lassen—

みん提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デス・スター撃破せり！

この報せに、銀河帝国の圧政に苦しむ人々の胸に希望が芽生える。

反乱軍は混乱する帝国軍にもう一撃を加えんとして、解体者の惑星ブラツカから旧共和国の戦艦、ヴェネター級スター・デストロイヤーを盗み出す。

元クローン・トルーパーのブラウン提督と、祖国を追われた元王族のニュー・ラツセン将軍がタツグを組み、着々と作戦準備を整えていた。

しかし、帝国軍もそれは同じであった……

目次

第1話	旧時代の英雄たち	1
第2話	作戦会議	6
第3話	帝国軍	13

第1話 旧時代の英雄たち

デス・スターの破壊と、同盟軍のヤヴィン4撤退作戦から少し時間を遡ったある星系。

その星は、共和国時代に勃発した戦争、“クローン戦争”で使用されていた両軍の軍艦がそこかしこに散らばっており、さながら軍艦の墓場というべき有り様だった。

終戦から20年以上が経つ今でもあまりに膨大すぎる数の艦は全ての解体が終わっておらず、完全に放置されている艦も少なくなかった。

その星ではこうした艦の解体によって生計を立てる解体者の集団、解体者ギルドがあつたが、星の環境もあつてあまり治安がいいとは言えず、犯罪者が横行するのもしばしばだった。

当然、盗みも多く、窃盗傷害、窃盗致死は日常茶飯事だったが、しかし。

その日の盗みは普段より何千倍も大きなものだった。

「おい！なぜあれが動くんだ、全部死んでたんじゃないのか!？」

小汚ない身なりの解体者の男たちは、すぐ背後で鳴動するそれに驚きつつも、半ば信じられないと言うような悲鳴を上げていた。

「知るか！兎に角逃げるぞ、ここにいたら巻き込まれる!」

背後で鳴動するそれは、辺りに散らばる部品や切断された船体、多数のギルド作業員、そしてお粗末な居住区さえも破壊し、その巨獣は深き眠りから醒めんとして咆哮を上げていた。

その巨獣の名は……

「なぜ、あれが……起きるんだ……戦争の残骸、ヴェネター級スター・デストロイヤー!!」

その巨獣の名は、ヴェネター級スター・デストロイヤー『ブライト』。クローン戦争を戦い抜いた武勲艦の1人だった。

彼女の覚醒から数週間後。

暗い宇宙に浮かぶ1つの惑星、その眼前にいくつもの航跡が光る。

それらは次第に数を増やし、やがて大きな編隊を組むと、その前方に巨大な軍艦が現れた。何もない空間から突如として現れたそれは共和国再建のための同盟軍、通称同盟軍または、反乱軍とも呼ばれる銀河で最大規模を誇る帝国反抗組織の同盟艦隊旗艦、『ホーム・ワン』である。

座乗する司令官アクバー提督は反乱軍、ひいては銀河最良の戦術家と名高く、彼の前には圧倒的物量を誇る帝国軍でさえ苦戦を余儀なくさせ、その頭脳は帝国さえも欲するほどだ。

そんな彼が、この惑星を訪れた理由はある作戦の進捗の確認と、それに関する作戦会議のためだった。

副次的に、反乱軍本拠地の選定も兼ねられていたが、これは重要度が低かった。

さて、『ホーム・ワン』は惑星軌道上に設置された宇宙ステーションに入港し、アクバー提督をステーションへと招き入れた。

「提督、お待ちしております。どうぞこちらへ、既に将校たちは集まっております」

宇宙ステーションの司令官がアクバー提督を迎える。

「うむ。首尾はどうかね？」

「問題ありません。現在のところ、全て順調です」

宇宙ステーションの外周部を歩き、併設されている造船所を眺めながら報告を受けるアクバー提督。

造船所には多数のフリゲートやコルベット、さらには主力艦も入渠しており、まさしく圧巻と言うべき眺めであった。

「件の艦は？」

アクバー提督の質問に、司令官が笑みを浮かべながら答える。

「準備はほぼ完了しました。艦長やクルーも、もう集まっております」
「結構」

艦の作業の様子を見るために造船区画へ向かうアクバー提督。

といってもステーションの下部がそうなので、エレベーターで下へ行くのだが。

エレベーターを出るとより鮮明に多数の艦艇が見えた。

その中に、一際目立つ艦影があった。

白い船体に特徴的な赤いラインとマークを携え、2本の角のようなブリッジを持つ巨大戦艦。

かつて、銀河中の全ての宙域で数えきれないほどの姉妹艦たちと共に、銀河のために戦っていた、知らぬもの無しの戦艦。

「おお……これがヴェネター級スター・デストロイヤーか……相変わらず美しい艦だ」

感嘆の言葉を漏らすと、アクバー提督は眼前に浮かぶその艦に、しばし釘付けとなった。

「ご存じなので？」

司令官が訊ねるので、アクバー提督は当然だと前置きして述べた。

「私も、クローン戦争に共和国側で参加していたからな。母星の上空に浮かぶのをよく見たよ。あの時はこれほど巨大な艦とは思わなかったがね」

珍しく子どものような笑顔を見せるアクバー提督を司令官は意外に思っていた。

笑み自体は時折見せるものの、こんなにはしゃぐような顔をするのは見たことがなかったのだ。

「……提督？」

だが、あんまり見入ってるのでは事が進まない。

少し気は引けたが、とりあえず話を進めることにした。

「あ、ああ、すまん。つい夢中になってしまった……オホン、作業の進捗はどうかね？」

咳払い1つでまたいつものアクバー提督に戻る。こういったタイプの指揮官たちは、感情の切り替えが相変わらず素早い。

「はい、復元作業は概ね完了。兵装やセンサー類は流石に古すぎたので、我が軍のモノに換装しています。格納庫も規格を変更し、クルーも80%の召集が完了しました」

手元のタブレットを見ながら、司令官はテキパキと説明をすませる。

「うむ。出来ればもう2〜3隻ほど欲しかったが、贅沢も言ってもら

んな。帝国軍の追跡は？」

「今のところはありませぬ。ですが、廃棄されたモノとはいえ、スター・デストロイヤーであるのに変わりありせん。帝国軍の追跡は時間の問題でしょう」

戦力の拡充はもちろん、ある作戦のためにこの艦が必要だったのだが、それよりも大きな問題が1つ、反乱軍にはあつた。

「しかし、これで一先ずはモン・カラマリ以外にも扱える主力艦の整備が出来ましたね」

「全くだ。反乱軍主力艦のほぼ全艦が私たちモン・カラマリしか扱えないとなると、まるで人手が足らんからな」

反乱軍が現在保有しているほぼ、唯一のスター・デストロイヤーに對抗可能な主力艦がモン・カラマリにしか扱えないモン・カラマリ・クルーザー（MCシリーズ）だったのだ。

元よりモン・カラマリは水の惑星モン・カラ出身の種族。帝国との戦争で辛くも宇宙へ逃れた者たちが、反乱軍に所属している。アクバー提督もその1人だ。

そのため、全体的に数が少ない。しかし、モン・カラマリ・クルーザーは貴重な戦力で需要は尽きない。

そのため、モン・カラマリ兵士たちの任務の増大や戦死率の拡大を招き、軍内でも問題視されていた。

そこで、ヴェネター級などの旧共和国、帝国軍主力艦などを鹵獲し、運用することでモン・カラマリ兵士の負担を減らそうという試みが浮上したのはある意味当然と言える。

『ブライト』はその初号艦となる。

だが、問題がなかったわけではなかった。

「ですが、なにより艦が古すぎてあちこちにガタが来ています。まともにも動かせるようには、なんとか持つていきますが、それでも五分五分ですね」

古すぎるがために、保守管理に人員を割いてしまい、結果的に運用クルーや、コストが増大したのでは意味がない。

だが、そこは仕方のないことだとアクバー提督は思う。

何しろ20年以上前にとつくに現役を引退した艦で、その間全く放置されていたのだ。

無事に起動し、ここまで運べただけでも奇跡といえるだろう。

「自動化やドロイドのカバーで何とかするしか無いな。鹵獲艦は手っ取り早く戦力化できるのが利点だが、その点今回は難解だな」

アクバー提督が言うと、突然後ろから声をかけられた。

クローン戦争中に何度も聞いたことのある声だった。

「それに関してはご心配なく。元々我々の艦です。いくら古かろうともしつかりと使つて見せますよ」

「待て、まさか君は……」

アクバー提督が言うと、彼は……少々老けてはいたが、確かにあの独特な憎まれ口のような声に聞こえた。

まさかと思うが、顔を見て確信する。

なるほど、秘策とはこのことか。

アクバー提督はアンティリーズから聞いていた秘策というのを思い出した。

「お久しぶりです、アクバー提督。コマンダー・ブラウン……失礼、ブラウン”提督”、ただいま参りました。」

そこにいたのは間違いなく、モン・カラで共に戦っていたクローン・トルーパーの1人、”元”コマンダー・ブラウンだった。

こうして、反乱軍は来る帝国軍の反抗に備えるべく、着々と準備を進めていた。

しかし、帝国もそれは同じだった。

第2話 作戦会議

アウター・リムの辺境のそのまた辺境の名も無き惑星。

そこには数百年前に知的種族（おそらく人間）が居住、開発したと思われる古いステーションと造船所があった。

帝国はおろか、旧共和国のデータベースにさえその惑星は記されておらず、反乱軍のある兵士が偶然見つけたステーションは、数少ない反乱軍の修理、造船基地として重宝されていた。

そして今、モン・カラムリ製の滑らかなフォルムが特徴的なクルーザーや、銀河にありふれるコルベットやフリゲートに混じり、異質なシルエットを持つ艦が胸踊らせる新たな航海の日々を待ち、静かに佇んでいた。

ステーション発令区画にある大会議室。かつては食堂を兼ねていたと思われるこの部屋は、今では隔離された防音設備を持つ高官専用の会議室となっており、軍規や軍事作戦に関する会議を行う重要な部屋となっていた。

さて、その日も反乱軍高官がその部屋に一堂に会し、ある作戦について議論しようとしていた。

「さて、全員集まったかね？」

会議の議長も務める同盟軍艦隊総司令官アクバー提督は、集まった高官らに確認をいれる。

どの高官も数多の作戦で功績を上げた英雄たちだった。

「はい、提督。全員出席しています。欠員ありません」

「よろしい」

錚々たる面々を前に、アクバー提督は気を引き締める。

「ではこれより、惑星ラツセンの帝国施設破壊と、そこにある膨大な武器及び艦船奪取のための軍事作戦について、最終的な確認と調整を行う。諸君の活発な議論に期待したい」

アクバー提督の開会宣言の後、銀河史に残る不思議な戦いの作戦会議が、いよいよ開始された。

「ではまず、作戦概要の前に惑星ラッセンについて」

ステーション基地司令官がホログラムを用意し、説明を始める。
指揮卓のホログラムが起動し、中央に銀河図が映し出される。

「惑星ラッセンは、コア・ワールドから外れた場所に位置し、ちょうど砂漠の星ジャクーの近くに存在します」

銀河図が縮小し、小さな星系を映し出す。そこには、ナブーやスカリフにも劣らないといえるほどの美しい姿をした星が見えた。

「美しい星です。かつては観光産業で潤っていた星ですが、帝国時代に入り、宇宙船の建造に必要な不可欠な資源……具体的にはハイパードライブの製造に必要な鉱石が発見されると、帝国はこれに目をつけます」

ホログラムは一気にラッセンの地表に飛び、その地表にある帝国の採掘施設を映し出す。

「当初は穏健にコトを済ませようとした帝国が、惑星そのものを超高額で買い取ろうと打診しましたが、これにラッセン王族は猛反発。激しい論争となりました」

今度はラッセンの上空に飛ぶと、2隻のスター・デストロイヤーを含めた帝国艦隊が映し出される。

「それから数ヶ月が経つと、艦隊が派遣され、1週間の睨み合いの後、遂に開戦。当初は優勢を保ったラッセン王国軍ですが、帝国の物量には敵わず、1ヶ月の攻防の後、敗北」

ホログラムは帝国艦隊とラッセン艦隊を映し出し、戦闘概要を表示した。

確かに、最初はコルベットとスター・ファイターが主力の小さな艦隊が確実に帝国艦隊を足止めし、善戦しているように見えた。

しかし、海とも称される帝国艦隊の波状攻撃には敵わず、無惨に碎け散って行くラッセン艦隊が映る。

痛ましい映像だった。

「惑星は占領され、残党は逮捕。一部の兵士や王族は脱出に成功したものの、残された惑星住民は奴隷となり、強制労働に従事させられて

います」

続いて、ホログラムにラッセン軌道上に浮かぶ帝国施設が映される。このステーションの倍はあろうかという巨大施設で、同じく造船所が併設され、日夜軍艦を生み出し続けている。

「その後、帝国は資源とエネルギーの有効活用のため、惑星軌道上に巨大ステーションを建設。ここではラッセンを含めた周辺惑星の統治を任されるモフ・ナミエが常駐し、圧政を敷いています。また、併設される造船所ではスター・デストロイヤーを含む様々な艦が生産され、帝国の恐怖の象徴として君臨しています」

帝国施設は圧巻の一言に過ぎるほど巨大で、まさに恐怖の象徴。

ひどく無機質で感情を感じられないそれは、まるで星を喰らう怪物のようにも見えた。

「ですが、それも間も無く終わります」

司令官はホログラムを切ると、集まった高官らに声高に告げる。

「我々が、この施設を破壊するからです」

高官らの顔に緊張が走る。

さて、いよいよここからが、会議の本番だ。

「まずは参加メンバーのおさらいです」

高官らの内でも前席に座る将校たちが1人ずつ立ち上がり、司令官による紹介を受ける。

「まず、主要機動戦力となります、スター・ファイター中隊は7個。いずれも、各戦線で武勲を立ててきた名パイロットたちです。今回は特例召集となります」

各中隊長が立ち上がる。何れも素人目にも只者には見えないオーラに包まれ、まるで生まれつきの戦士のように堂々としていた。

「各中隊と、その隊長たちを1人ずつご紹介いたします。バレット中隊、ロング中佐。スコーン中隊、ラッセン將軍。キング中隊、スミス少佐。ブラウン中隊、マルダー大佐。バイオレット中隊、ミア大尉。ガス中隊、シーザー中佐。そして、特殊部隊であるドライ中隊、シー

ル中尉。以上7名」

7人の中隊隊長たちの中には今回の作戦目標で、辛くも祖国を脱出した王族の1人である、ニユー・ラツセン將軍の姿もあった。

祖国を脱出した後、彼は初期反乱運動に加わり、そこで予てよりもあったパイロットとしての採用を完全開花。

敵ファイター10機に囲まれ、その内3機を撃墜して逃げ切るなど、錚々たる戦果を上げていた。

今回はスター・ファイター中隊の総指揮も執ることになっている。

祖国奪還の作戦とあって、彼はより一層覚悟を固めていた。

「次に、艦隊指揮官です。コチラは、クローン戦争中にはコマンドーを務め、後の帝国誕生時に軍から離反し、反乱運動を展開していたブラウン提督です」

ブラウン提督は静かに立ち上がると、老化が早いクローン特有の白髪混じりの髪を携えながらも、一本の鉄骨が通っているようなまっすぐな背筋に、貫禄と威厳を併せ持っていた。

「そして、ブラウン提督の補佐官を務めるコーネル大佐、旗艦ブライト艦長、バーミンガム大佐。そして——」

参加する主な将校たちの紹介が終わると、議事の進行役はブラウン提督にバトンタッチされた。

「ここからは、作戦そのものに関する確認となる。この作戦の成否は、ガス、ドライの両中隊の働き如何にかかっているといっても過言では無い。特にドライ中隊は、今後の反乱軍の活動そのものにも影響すると心得て欲しい」

高官、特に作戦参加メンバーに緊張が走る。元コマンドー故の威圧感は未だ健在であると、改めて実感する。

「……さて、少し脅かしすぎたな。ここからは少し気楽に聞いて欲しい。なに、今すぐに作戦が始まるわけではないからな」

メンバーの緊張が少し解けたのか、控えめな笑い声が響く。

人生経験豊富だからか、彼は人の心を掴むのが上手かった。

「さて、まずは参加兵力のおさらいだ。先述のスター・ファイター中隊7個と、これの母艦となるブラツカの解体所から盗……」

有り難く平和的に調達したヴェネター級スター・デストロイヤーが1隻。それと、同じく平和的に調達したミューニフィセント級が2隻。コチラは損傷が激しかったため、ほぼ新造レベルだが火力はピカイチだ。さらに、おなじみのCR-90コルベット3隻と、ネビュロンBフリゲート2隻、スフィルナ級2隻、1隻は輸送型だ。と、レイア姫が用意してくれたペルタ級1隻、初期反乱運動にも使われた艦で、信頼性も抜群だ。そして、GR-75輸送船4隻、ブラハトック級が4隻。合計19隻の艦隊、なかなかだろう？」

ホログラムに表示される艦隊は、確かになかなかモノで、初期反乱運動の頃と比べると、反乱軍の規模拡大を思わせた。

「さて、これほどの艦隊ながら、主戦力はあくまでスター・ファイター中隊だ。特に重要となるのは先の通り、ガス、ドライ中隊だ。その中でも、ガス中隊は奇襲成功の成否に関わっていると言える」

ガス中隊長シーザー中佐が頷く。彼は元帝国軍研究者で、科学部隊に所属していたが、冤罪をかけられて帝国から亡命。

後に反乱軍に加わって、パイロット兼技術士官となった異色の経歴を持つ男だった。

少し態度が鼻につくところもあるが、誠実な男である。

「帝国施設は巨大なリングが3つ重なった基幹構造から三方に造船所や宇宙港が伸びる特徴的な形をしている。だが、今回の目標はあくまで艦船、武器の奪取となる。そのため、無用な破壊はなるべく避け、敵守備艦隊を殲滅するのが最優先目標となる」

ホログラムに映る帝国艦隊。反乱軍艦隊にも負けじ劣らずの規模だ。

「スター・デストロイヤーやフリゲートばかりが目立つが、最優先目標はこの艦だ」

スター・デストロイヤーのような楔形の船体と、艦の上下に4つずつドーム形の構造物を持つ変わったシルエットの艦だった。

「こいつはインターディクター・クルーザー、コイツをどうにかしなきゃ、艦隊は迂闊に攻撃を仕掛けられなくなる」

「提督、その艦は一体どのような艦なのでしょう？」

1人の将校が質問する。確かに、この艦は数も少なく、前線でこれと対峙したことのある兵士は少なかつた。

「それについては私が説明しよう」

と、突然シーザーが話し始める。彼は元帝国軍科学者で、その点に關してはブラウンよりも知識があつた。

「ここにいる者なら、ハイパー・スペースに時折発生する重力井戸は知っているだろう。この艦はそれを人為的に発生させ、ハイパードライブ中の艦船を無理やりリアルスペースに引きずり出す装置を搭載した、帝国軍の最新鋭の軍艦だ」

ホログラムに映し出される特異なスター・デストロイヤーをにらむ。

「つまり、コイツが惑星上空に居座っている限り、我が軍は奇襲をかけることも、その後逃げることも出来ない。速力と展開力では向こうの方が圧倒的だ。勝ち目はない」

将校たちに不安な表情が過る。

「では、どうすれば……」

「簡単なことだ」

相手を挑発するようにニヤリと笑うブラウン。

「これこそが、今回の作戦の大きな肝だった。」

「敵にバレないように近付けばいい。つまり、」

「ここで初めて、ラッセンが口を開く。」

「スター・ファイターで敵のセンサーを掻い潜って急接近、これしかねえよ」

「……てことはまたいつも通りってわけですか」

バイオレット中隊長、ミーアがぼやく。そう、同盟軍の主力、肝心要はいつもスター・ファイターだ。巨大な軍艦が何十隻あつても結局はスター・ファイター頼みだ。

「そう言うわけで、まあ、規模が違うだけでやることはいつも通りだ。気楽に行こうじゃないか」

どこか樂觀視し、なるようになると思ふまで言うほどのブラウンだが、こう言った時にはむしろ気が楽になるといふものである。

彼の人望も、そうして形作られている。

「さて、作戦を詰めていこう」

その後三日三晩作戦が練られた。各将兵の経験と信頼ある兵器に任せ、様々な意見が出され、議論された。

作戦は完璧。それを遂行する戦力も整いつつあった。

だが、帝国軍も指を咥えて見ていたわけではなかった。

一部の将兵たちは来るであろう反乱軍を迎え撃たんと、着々と準備を進めていた……………

第3話 帝国軍

アウターリムのはずれの小さな星系。そこには銀河随一の美しさを誇る惑星が浮かんでいた。

惑星表面の8割を占める海洋は蒼く輝き、珊瑚礁によって形作られた島嶼群に、様々な生命が存在していた。

今も大部分では美しい環境が残っている。

だが、惑星の一部、かつては王都と呼ばれていた歴史ある街は廃れ、劣悪極まりない貧民街となっていた。

都市の中央、王宮があつた場所には鉱石採掘のための巨大なボーリング塔が聳え立ち、古びたドロイドや貧相な格好をした元市民が休まなく働かされていた。

ボーリング塔の真横にある帝国軍管理センターには、高らかに帝国国旗が掲げられていた。

ここは惑星ラツセン。美しく、平和だった国は跡形もなくなり、代わりに銀河の覇者たらんとする銀河帝国が君臨し、市民、そして惑星そのものを食い散らかしていた。

惑星ラツセン軌道上、銀河帝国軍基地。ステーション

そこには3人の提督と1人の将軍、そしてラツセン含む近隣星系を統括するモフ・ナミエの5人の高位軍人が常駐し、銀河帝国の力を誇示していた。

圧倒的な軍事力を誇る帝国軍だが、ヤヴィンの戦い以降、その力は一時的に弱まっていた。

帝国恐怖の象徴として君臨するはずだったデス・スターは反乱軍との戦闘で喪失。

さらにはデス・スター司令官であり、モフ総司令官たるグラント・モフ・ターキンも戦死し、生存者はベイダー卿たった1人という史上最悪の敗北を喫して半年。

未だに回復しきつたとは言いがたい帝国軍は特に高位軍人が足りなくなり、特例的に将軍や提督に抜擢される将校が増え、軍はバランス

を欠いていた。

また、勢い付いた反乱軍による攻撃が激化。これに触発されて各惑星でも蜂起運動が続発するなど、帝国にとって苦しい時代であった。しかし、元より海とも称される帝国艦隊は未だそのほとんどすべてが健在であり、各地の戦闘で順調に勝利を重ねつつあった。

だが、戦力不足は目に見えていた。戦闘任務はもちろんのこと、警戒すべき航路や反乱軍の拠点発見のための調査部隊など、副次的な任務が増えたことにより、さらに高性能なスター・デストロイヤーをより大量に配備する必要性に迫られていた。

銀河に無数に存在する帝国軍造船所にも、艦艇の増産と新規開発命令が出され、同時にその防衛や警戒も強化されていた。

ラツセンの造船所は特にその最たるものとして3隻のスター・デストロイヤーを中心とした艦隊が配備されていた。

そして、その内の1隻であるモフ・ナミエの旗艦『サーモン』では、5人の高位軍人たちの定例会議が開かれていた。

「何度言えばわかる、ラルフ提督。今以上の嚴重警戒など戦力の過剰投入だ。そんな余裕など今の帝国軍にはない」

外見からもわかるほどのもて余された贅肉を特注の椅子に沈め、虚ろな目で彼を睨むのはセクター7星系総督モフ・ナミエだ。

「それは重々承知です。ですが十中八九、反乱軍は次にここへやってきます。どれだけの戦力で来るかわからない以上、万全の戦力で彼らを迎え撃つ必要があります。そのためには少なくともあと2隻のスター・デストロイヤーが……」

「提督、一度は言わんぞ」

ラルフの言葉を遮り、モフ・ナミエは色味と光を失った目でまたしても彼を睨む。

かつては有能な戦略家として名を馳せていたそうだが、今やその勇名は鳴りを潜め、権力と地位に固執する三流の独善的な為政者へと成り下がっている。

こうなつては、かつての名将も形無しだ。

「……失礼しました、閣下。出すぎた真似をお許してください」

こう言う時は下手に反論しない方がいい。一時的にでも相手に従った方が得だ。

穏健派な彼の経験から経た処世術のひとつだった。

「ふむ、それで良い。さて、他に具申すべきことがある者はいるかね？」

静まり返る会議室。もし、この空気感の中反論できたならばそれは命知らずなジエダイくらいだろう。

「では、本日の定例会議はこれにて終了する。各々、自身の立場をわきまえ、職務に一層奮起せよ、解散」

「……閣下はすっかり覇気が失くなっておる。あんなナリでは部下どころか民にさえも、帝国軍の威光を轟かすことなど不可能だ」

他の士官の目もあるシャトルの船内で、大っぴらにモフ・ナミエを批判するのはラツセン防衛艦隊の次席指揮官オービル提督だ。インターデイクター艦『ウルフ』を指揮する彼は厳格な性格で、モフ・ナミエのような軟弱な士官は銀河の支配者たる帝国軍には必要ない。とまで断言するほどだった。

「オービル提督、今は我々だけでなく、他の士官もいます。そのような発言は控えられた方が……」

弱々しく、控えめにオービルに反論するのはノリントン提督。ラツセン軌道上のステーション基地司令官で、高級将校の大量戦死後に急遽抜擢された新提督の1人だ。

「ノリントン、貴官こそ帝国軍提督としての自覚が足らんのではないか。そもそも貴官は自分の考えを持たず、他人に賛同するばかりではないか。その上——」

帝国軍人たるものは……と、いつにも増した熱量で語るオービルに、今度はもはや何もいえず、ただ頷くばかりのノリントン。

もはや見慣れた光景だったが、その日はどうも落ち着かなかった。「どうした、そわそわして。腹でも痛むか？」

隣に座るのは帝国アカデミー同期で、昔からなにかと同じ勤務地に

なっていた將軍、ザラだった。

「いやなに、何でもないさ……いや、少し何でもあるな」

コイツに隠し通すのは無理だ。経験上、素直に白状することにした。

「やはりどうも気掛かりでならんのだ」

「反乱軍か？」

「ああ」

ラルフは腕を組み、天井をじつと見つめる。考え事をするときはいつもその格好だった。

「気掛かりもなにも……モフ・ハット（モフ・ナミエの渾名。体系と鈍重な動きからこう呼ばれる）の言い分は確かに気に食わんが、それでも事実だ。わざわざこんな厳戒態勢に奴らが突っ込んでくるか。まあ、スカリフの例もあるし、一概には言えんが」

少し皮肉ったらしい喋り方が彼の特徴だが、今日はそれに茶々を入れたりしなかった。

「いや、そうではなくてだ。俺が気になってるのはこの星の元王族だ」「元王族……？ああ、確かに取り逃がした奴らが数名いると聞いたな」「中にはかなり名の知れたパイロットもいたそうだ。そんな連中が、仕掛けてこないわけではない……というのは考えすぎかな」

納得した表情をするザラだが、実際は何か悪い予感がするという程度のもので、確証も裏付けもない。

それにモフ・ナミエの言うことも確かで、帝国軍は戦力が足りない。今さら辺境の造船所の1つに集結できるはずもない。

「まあ、ほとんど俺の勘だな」

「ということとはまた根拠も無しか。だが、貴様がそこまで言うのなら何かはあるだろう。部下たちにも警戒強化ぐらいはさせようか」

ザラの提案に頷くラルフ。

「助かる。いつも迷惑かけるな」

「なに、俺と貴様の仲だろう」

気兼ね無く腹の内をさらけ出せる親友というのはなんと有難いことか、彼のおかげで骨身に染みていた。

ステーション上空に浮かぶ純白の巨大戦艦、スター・デストロイヤー。それは、見るものを圧倒させ、畏怖を呼び、立ち向かう気力さえも奪い去るような絶望的な戦闘能力を誇る銀河帝国の力の源だ。

単艦でも惑星を丸ごと1つ制圧するというその艦がこのステーション上空には3隻も常駐し、さらに2隻のインターディクター艦、5隻のクルーザーに無数のスター・ファイターを有し、まさしく敵無しといえる強固な防衛網を持っていた。

その内の1隻、スター・デストロイヤー『アースガルド』の艦内。本艦を旗艦とするラルフは、自室で古い記録と小一時間にらみ合っていた。

するとそこへ副官のアキヴァ少佐が入室する。

「提督、失礼します。間も無く会議のお時間ですので、準備を」

「ああ、すまない。もうそんな時間か。すぐに行くよ」

ホログラムを閉じようとしたとき、アキヴァ少佐が物珍しそうに訊ねた。

「古そうな記録ですね。何を調べてらしたので？」

「この星の旧王家のことだ。たしか、一人エースパイロットがいたような気がしてな」

ホログラムにはまだ、ラッセンに王家が存在し、独立を保っていた頃の象徴というべき男が映っていた。

少年期の写真だろうから、今は相応に歳を取っているはずである。

「エースパイロット……といえば、亡命した例の第1王子ですか？」

その男は圧倒的優勢を誇る帝国軍相手に一步も引かずに戦い、帝国軍將兵からも称賛を受ける名將だった。

「彼が動き出すのではと胸騒ぎがしてならんだ。……思い違いだと信じたいがな」

「提督はいつも考えすぎなのです。やたらと悪い予想ばかりすることもないでしょう」

アキヴァ少佐は信頼に足る士官だが、些か齒に衣着せぬ物言いが気になる。

それで以前は軍法会議一步手前の事態を引き起こしたこともあるほどで、唯一の彼の心配なところだ。

「貴官は貴官で、もう少し言い方というのが……いや、今はよそう」「懸命です。会議まで時間がないのでお急ぎください」

彼はそう言うと、足早に部屋を出ていった。

再び1人になった室内で、記録の中の男と向き合う。

「ニユー・ラッセンか……」

今度こそホログラムを切ると、彼はそそくさと退室していった。